中国・湖南省における農家楽宿泊機能の実態と利用者評価

－株洲市市域を事例として－

A STUDY ON THE ACCOMMODATION FUNCTION AND VISITORS' EVALUATION
OF HAPPY FARMHOUSE IN HUNAN PROVINCE, CHINA

－ A case study of town area of Zhuzhou city －

周 晟*, 池田孝之**

Sheng ZHOU and Takayuki IKEDA

In this study, firstly by gathering and analyzing previous studies, the development process of accommodation function of the livable Happy Farmhouse in Zhuzhou City was reviewed with its characteristics being summarized. Secondly, by practicing an on-spot investigation, the current situation of the livable happy farmhouse in this area was studied. Thirdly, by carrying out a consciousness survey of overnight visitors, views about the accommodation conditions in the Happy Farmhouse were collected. Based on the classification of the Happy Farmhouse and by analyzing the points of view from different visitor groups, charms and problems were determined. At the end of this paper, suggestions for the improvement of the living conditions in the Happy Farmhouse were discussed.

Keywords : China, Hunan, Happy Farmhouse, Accommodation, Overnight Visitor, Evaluation

中国, 湖南, 農家楽, 宿泊機能, 利用者, 評価

1 はじめに

1.1 研究の背景と目的

中国の観光業は20年近くの高度成長を経て、既に新しい段階^{注1)}に入ってきている。農村地域においては、都市との交流活動により地域振興を図ろうとする取り組みが見られ、特に農家楽と呼ばれている農村に滞在する短期観光が注目されている。農家楽観光は、従来のリゾート観光を主に海外レジャーの観光客を対象とするものに対して、地域近くの来訪者を主要な利用対象とし、農村地域にある歴史・自然資源や地場産業を観光業に結びつけている。

一般的に、農家楽は美しく、交通の便のよい都市近くの農村・郊外に建てられ、ホテルと同じような客室を持ちながら、宿泊料はホテルより低価格で利用でき、それにレストラン、カラオケ等の飲食・娯楽施設が完備され、さらに釣り場やゴルフ場等の特別な施設も設けられ、観光も農業体験も娯楽も一箇所で済むようになった。このような魅力を持つため、農家楽の利用者がより増加してきている。特に近年においては滞在する利用が増える傾向が見られ、湖南省株洲市農家楽では2008年に滞在する利用回数が240万回を超え、宿泊及び関連サービスによる年間収入は3億元に上り、2005年と比べて50%以上増えている¹⁾。

筆者らは2007年株洲市農家楽の実態について調査し、農家楽の発展経緯・現状を整理・分析した上で、その特徴を把握し、また、利用者の意識調査と、経営者へのヒアリング調査によって農家楽の経営効果・問題点・課題について考察した。前回の考察により、農村・

名所周辺にある農家楽に滞在する利用者が相対的に多いことを明らかにし、短期滞在する利用者向けの宿泊機能の検討が必要になると指摘した。しかしながら、前回の研究では滞在する利用者の滞在経験や宿泊への評価を直接に尋ねることはしておらず、農家楽の宿泊機能について利用者の意識や志向等は未解明であった。従って、本研究では、①農家楽の宿泊機能に着目し、その実態を明らかにする、そして②宿泊先として利用された農家楽に対する宿泊客の評価を解明し、宿泊可能な農家楽の魅力と抱える問題点を把握し、今後の農家楽における宿泊機能向上のための方策について考察する。

1.2 既往研究

1995年から2005年にかけての農家楽に関する研究は、農家楽の発展原因や文化・経済意義に着目する基礎的な研究が多い。2005年からの農家楽に関する研究については、主に五つのグループ^{注2)}に分けられる。①経営上の問題とその解決提案に関する研究は、王紅らの「農家楽開発経営中存在的問題及解決途径(安徽農業科学、2008.8)」という研究論文があり、②サービスの定価研究は、舒昶らの「農家楽消費價格研究(價格与市场、2004.7)」との研究があり、③季節変更による農家楽経営への影響に関する研究は、陈輝らが「休閒農業走向讨论(西南民族学院学报、1998.4)」で考察した、④経営方式のあり方の検討については、胡先群らが「農家楽旅遊対經濟發展的作用及文化意義—郴縣農家旅遊調查(中共成都党委学报、1999.4)」で論述したが、⑤行政管理に関する研究は、楊繼瑞らの研究論文「農家楽健康發展的思考」(決策諮詢通讯、2004.8)がある。

* 琉球大学大学院 博士後期課程・農修

Graduate Student, Graduate School of Engineering and Science, University of the Ryukyus, M. Agr.

** 琉球大学工学部 教授・工博

Prof., Faculty of Engineering, University of the Ryukyus, Dr. Eng.

本研究では、筆者らの研究論文の「中国・湖南省における農家楽の利用事態に関する考察」²⁾に基づき、そこでの宿泊先であった農家楽を現地調査の対象に抽出し、宿泊サービスを受けた利用者を意識調査の対象として、農家楽の宿泊機能及び利用者の意識を探索。

1.3 研究の方法

①現地実態調査：調査対象地区は、農家楽観光活動が活発化している株洲市の五地区とする。平成20年8月15日から9月25日の間、前回の調査した89箇所³⁾農家楽のうち、農業経営に主軸を置き、宿泊可能な農家楽の44箇所(表2)を抽出し、農家楽の立地特徴、宿泊施設・設備、周辺の公共施設、サービス等について現地調査を行った。調査地区の内訳は、石峰区雲田郷6箇所、荷塘区仙庾嶺の10箇所と、株洲県大京郷の10箇所、天元区馬家河鎮と群豊鎮の12箇所、芦淞区曲尺郷6箇所である。

図1 アンケート対象農家楽の位置⁴⁾

*右の図については、△は近郊農家楽で、○は農村農家楽で、●は名所農家楽である
*灰色の部分の部分は株洲市市域の中心市街地である
*星印は市内五つ地区の地区政府の位置である

②来訪者意識調査：来訪者側の調査は、来訪者が滞在した農家楽についての宿泊経験やサービスに対する満足度を調べた⁵⁾。来訪者の1グループごとに2枚の調査表を配布し、できる限り年齢・性別の異なる2名の回答を求め、その結果は162グループ(全配布グループの54%)から288件(全回収件の56%)の有効回答を得た。意識調査では農家楽の立地、宿泊施設・設備等に対する利用者の意見を求めた。そして、来訪者からみた農家楽への満足度と問題点を観光、建物・設備、ホスピタリティ、アクティビティ面から考察した。

2 農家楽における宿泊機能

農家楽は農村で良質な食品を食べ、歴史・自然・文化も体験でき、利用者の心身のリフレッシュを図る観光である一方で、地域に住む人々にとって販売や宿泊等サービスによる収益性があり、生活・文化等を蓄積することができる経営方式と定義できる。80年代から、中国四川省を始めとして農家楽は急速に普及してきたが、1998年に中央政府による都市農村交流のキャンペーンをきっかけにし、農家楽は全国へと爆発的に広がり、2000年前後全国的に流行してきた。湖南省では、90年代後期に政府が制定した観光計画に応じ、大都市近郊に農家楽が建てられ、次第に農村地域・都市内部へ発展した。株洲市の農家楽は農家飯店に基づいて発展してきたものである。

1998年、政府組織「観光産業発展グループ」の指導によって、株洲市における観光産業の発展に伴い、多くの場所で農家飯店が建設された。その後、市政府が提出した農村観光の構想に応じて多くの農家飯店は農家楽に移行してきた。表1に示すように、2001年以前、株洲市では農業や林業等との兼業をしながら、飲食を中心とする農家楽が多かった。宿泊施設については、既存家屋の改築程度で、設備は家族と共用となっていた。このような農家楽を起業する費用が低いため、経営者が全ての開業費用を負担していた。この段階では、大規模の建設が少ないことから、農村における地域らしさが最も残されていた。だが、誘客システムの不備のため、宿泊客が少なかった。2001年から農家楽の持ち主は農業組合や社会組織から融資を受け始め、農家楽の増改築は流行になり、宿泊できる農家楽の数が大幅に増えてきた。しかしながら、収容能力が高くなる一方で、設備面とのアンバランスが目立つようになった。施設の使用不便や衛生、安全問題への心配から、宿泊客の増える傾向がまだ見られなかった。

表1 株洲市農家楽における宿泊機能の発展段階⁶⁾

時間	第一段階 90年代後期～	第二段階 2001～2003	第三段階 2003～2007	第四段階 2007～
建物設備	既存家屋の改築程度、設備は家族と共用で整っていない	増改築が盛んに行われ、収容力は大きくなり、設備面とのアンバランスが目立つ	増改築は一段落し、設備も整い、宿泊できる農家楽、農村旅館、グリーンホテル共存するところも現れる	宿泊できる農家楽では農家旅館、グリーンホテルと同等の建築、設備を持つ
資金	投資額が低いため、経営者の家族が負担する	組合や社会組織等から融資を受け始める	農村信用合作社・農業銀行から融資・貸し付けを受けられる	投資額が大きくなるため、借り入れだけで足りず、土地の売却や賃貸が行われる
特徴	地域らしさを最も残す	宿泊できる農家楽の改造が流行になる	旅館的な外見を持った農家楽が多くなった	農家楽、農村旅館、ホテルが混在している
問題点	誘客システム不備で宿泊利用者が少ない	オフ・シーズンの対策を考えないと経営が苦しい	投資額が多くなり、施設更新の資金に困る	競争は激しくなり、集客が難しくなってくる
地既存	なし	芦淞区曲尺郷、石峰区雲田郷	天元区馬家河鎮と群豊鎮	株洲県大京郷、荷塘区仙庾嶺郷
発展性	近郊 飲食を中心とする農家楽一時的に人気となる	用地制限のため、これ以上の発展できない。飲食を中心とするところが多い	—	農業以外の観光資源がなければこの段階へは推移できない。特に名所周辺ではこのようになっている
農村	—	施設化に資金土地が必要で農業との両立は難しい	—	—
名所	—	—	施設化に資金土地が必要で農業との両立は難しい	—

図2 農家楽宿泊室の平面図⁷⁾

この段階では、経営者にとってオフシーズンに関する対策はますます重要になってきた。2003 年から、一部の農家楽において飲食・宿泊を専業するビジネスが始まり、多くの地区にはグリーンホテルや農家旅館等が建てられた。集客への競争が激しくなったことから、農家楽の施設面についても急速に改善してきた。だが、農家楽経営への投資額が多くなり、施設建設するためにも資金・土地が必要となるため、農業との両立は難しくなってきた。農業以外の観光資源がなければ、宿泊できる農家楽の発展は非常に難しいとみられている。2007 年まで、株洲市大京郷等の名所周辺にはホテルと同じような建物・設備を持つ農家楽が発展してきたが、それ以外の多くの地区では農家旅館の外見の規模が小さい農家楽が多かった。

来訪者が宿泊するための部屋は、農家の自宅の一室、あるいは昔の農業用の空き部屋を改造したものが多かったが、近年から新築、増・改築が流行になり、建築も欧米風や中国少数民族風^{注8)}となり、RC 造以外、CB 造や木造や等様々な構造に発展してきた。その結果、古い民家を転用するケースは僅かとなっている。また、来訪客のプライバシーや衛生面への配慮から、新築された建物は経営者の住宅からだんだん離れつつある。株洲市では発展途上の農家楽に対してホテルの基準を導入した^{注9)}ため、現在農家楽における宿泊室はホテルのような洋室とする傾向がみられている。室内にある設備も新しく、テレビ、エアコンが付き、専用のトイレ、シャワー室も設けられている。だが、ソフト面のサービスについては、家庭的で素朴な接客方式は以前と変わらない。都市内部・近郊の農家楽は、建設用地が取りにくいいため、現在でも客の寝室を除き、レストラン・廊下・シャワー室・トイレ等の部分を共用するケースが多い。

農家楽利用者の数は季節によって大幅に変わるため、長期的に雇用された専門的な従業員は非常に少ない。一般的に、多くの従業員は経営者の家族、あるいは地元の若者であり、大体一時雇用されている。しかし、従業員の専門性が足りないことで、緊急な事態に対する対応不足や来訪者との交流がしにくい等の問題があった。従業員のサービスレベルを向上させるため、2009 年から株洲市では農家楽の従業員の雇用・処遇・就労環境に関する方針、各種制度の検討を始め、管理職向けの従業員労務管理研修も実施した。

株洲市では宿泊可能な農家楽は旅行代理店と契約していないものが多く、その理由としては、旅行代理店の契約に斡旋料がかかることがあげられる^{注10)}。この点においてグリーンホテルや農家旅館と異なる。しかしながら、農家楽の利用者にとっては、旅行代理店と契約のない農家楽の情報を得にくいという不便さがあった。

3. 農家楽に関する実態調査

3.1 調査対象の概要

調査した 44 箇所の農家楽を表 2 にまとめた。調査項目について、ハード面においては農家楽の総面積、建築面積、別荘・客室の数、内装のスタイル、駐車場の有無等を含め、ソフト面においては宿泊

設備の提供方式、一日あたりの出費、専門従業員の有無等となっている。項目によって農家楽の合計を表 3 にまとめた。調査によると、この 44 箇所の農家楽は市域の五区・県にあるが、全体からみると、異なる場所であっても顕著な相違がなく、ここでは中心市街地から離れた距離と農家楽の周辺環境特徴によって、調査したものを近郊、農村、名所三つのタイプに分けた^{注11)}。

近郊農家楽は芦淞区曲尺郷、天元区馬家河鎮と群豊鎮にあり、建設用地が取りにくいいため、経営者が自分の住宅を飲食・宿泊施設として利用している。農村型農家楽は石峰区雲田郷にあり、都市の中心市街地から少し離れているため、週末には来訪者が相対的に多かった。経営者は自宅を中心とし、近くには宿泊利用者のための建物を増・改築し、周辺にある菜園、池、林地を活用しながら、来訪者に対して多くのサービスを提供できる。名所型の農家楽は荷塘区仙庾嶺と株洲県大京にあり、利用者のために新築した建物を中心とし、周辺の菜園、果樹園、池等の農業資源、山、樹林等の自然資源を活用するものである。長期休暇の利用者が多く、名所への足場として利用されたケースが多かった^{注12)}。

3.1.1 宿泊室及び関連施設の提供

表 2 調査した宿泊できる農家楽のリスト^{注13)}

地区	農家楽名	総面積 ha	建築 m ²	別荘 棟	客室 室	内装 方式	提供 方式	トイレ 場	駐車場 年間/人	宿泊者 元/日	従業員 人	立地	立地特徴	
石峰区	旺旺農家楽	0.1	200	1	4	洋	新	新	無	1200	80	4	農	果樹園
	沙坡里農家楽	53	1800	36	54	○	新	新	有	6000	50	20◎	農	樹林/湖
	桃原農家楽	1	300	2	6	洋	新	新	無	1000	50	4	農	果樹園
	桃花農家楽	0.8	280	10	10	洋	新	新	無	1200	50	6◎	農	樹林/湖
	紅桔農家楽	0.5	150	1	5	洋	新	新	無	800	30	4	農	果樹園
	阿香農家楽	0.1	120	1	3	○	新	新	無	800	40	3	農	樹林/湖
	雲柯山莊	0.5	300	1	3	洋	新	新	無	5000	70	3	名	野山/湖
荷塘区	月心園	0.7	570	2	6	洋	改	改	無	6000	80	4	名	樹林/湖
	仙女湖農家楽	0.7	500	4	6	洋	新	新	無	8200	120	6	名	湖
	菜園山莊	0.2	240	0	2	○	改	新	無	3000	80	4	名	農園
	仙閣樓	0.1	200	2	4	洋	新	新	無	2000	100	8	名	樹林/池
	仙庾酒家	0.6	500	5	5	洋	新	新	有	2000	120	6	名	竹林/湖
	逸趣園	2.4	600	4	4	洋	新	新	無	1800	100	6	名	野山/湖
	東方紅農家楽	0.1	180	2	4	○	新	新	無	2400	120	4	名	野山/農園
芦淞区	仙庾人家	0.1	200	2	4	○	新	新	無	2000	100	4	名	野山/農園
	醉仙園	0.1	200	1	2	○	新	新	無	1200	80	4	名	野山/農園
	陳家山莊	0.3	400	3	5	洋	新	新	有	1200	80	4◎	近	果樹園
	小蘭農家楽	0.3	240	2	4	洋	改	改	有	600	100	4◎	近	菜園/池
	香鈴農家楽	0.1	220	0	2	○	改	改	無	900	100	4	近	池
	万龍農家楽	0.3	240	0	3	○	併	新	無	800	100	2	近	山林
	山莊農家楽	0.3	240	0	4	○	改	改	無	1000	100	4◎	近	山林
天元区	如意農家楽	0.1	200	0	2	○	改	改	無	500	100	6	近	山林
	自能農家楽	4	500	3	10	洋	新	新	有	2000	120	8◎	近	果樹園/池
	源始農家楽	1.7	220	0	1	○	併	新	無	1500	120	3	近	池
	新孟農家楽	2	300	1	4	洋	改	改	有	1800	120	8◎	近	池/農園
	湘銀生態園	1.3	200	0	5	洋	改	改	無	1600	120	7	近	山林/湖
	慶祥農家楽	2.3	400	0	1	○	改	併	無	1200	120	4	近	農園/菜園
	明靜農家楽	1.3	200	0	4	○	改	新	無	1800	120	6◎	近	農園/池
株洲県	福仙山莊	2.7	500	20	40	洋	新	併	有	2400	120	10◎	近	樹林/竹林
	福内山莊	2.7	250	0	20	○	改	併	無	1500	120	8◎	近	花畑/竹林
	大坡農家楽	1	180	0	6	○	改	新	無	3000	120	8◎	近	花畑/竹林
	白露湖生態農園	2.5	300	0	8	○	改	新	無	1200	120	9◎	近	湖
	白蓮温泉基地	1.3	300	0	3	○	改	新	無	1000	120	6◎	近	湖
	神農生態園	45	3000	40	80	洋	新	新	有	18000	120	60◎	近	山林/農園
	金龍農家楽	0.1	280	0	5	○	新	新	無	800	80	5	近	湖/山林
株洲市	度假農家楽	0.1	180	0	2	○	新	新	無	500	80	4	名	湖
	芳草坊	0.1	160	0	2	○	新	改	無	450	80	4	名	湖
	広島農家楽	0.5	860	20	40	洋	新	新	有	2600	80	10	名	菜園/農園
	太子島農家楽	0.7	650	10	20	洋	新	新	有	2800	80	8	名	湖/農園
	柴火農家楽	0.1	180	1	2	洋	新	新	有	500	80	3	名	湖
	仙鶴湖農家楽	0.1	180	0	2	○	新	新	無	400	80	3	名	湖/果樹林
	杰華農家楽	0.1	180	0	2	○	改	改	無	450	80	3	名	菜園/湖
株洲市	孟良農家楽	0.2	200	0	2	○	改	改	無	500	80	4	名	湖/果樹林
	易佳農家楽	0.1	180	0	2	○	新	新	無	400	80	2	名	竹林/池
内装については、洋=様式、○=普通の民家スタイル；接客建物、トイレ、駐車場については、新=新築、改=改造・改装、併=併用；◎=専門的な従業員がいる；タイプについては、近=近郊型、農=農村型、名=名所型														

内装については、洋=様式、○=普通の民家スタイル；接客建物、トイレ、駐車場については、新=新築、改=改造、改装、併=併用；◎=専門的な従業員がいる；タイプについては、近=近郊型、農=農村型、名=名所型

表 3 項目によって農家楽の合計

立地別	接客室			トイレ・シャワー室			駐車場		宿泊料金(元・日)			専門的な従業員		他のサービス	
	別荘新築	改良・改造	併用	新築	改良・改造	併用	あり	なし	50元未満	50～80元	80元以上	あり	なし	あり	なし
近郊型	4(22%)	12(67%)	2(11%)	9(50%)	6(33%)	3(17%)	6(33%)	12(67%)	2(11%)	10(56%)	6(33%)	12(67%)	6(33%)	18(100%)	—
農村型	6(100%)	—	—	6(100%)	—	—	2(33%)	4(67%)	—	2(33%)	4(67%)	2(60%)	4(40%)	6(100%)	—
名所型	16(80%)	4(20%)	—	16(80%)	4(20%)	—	4(25%)	16(75%)	—	14(70%)	6(30%)	—	20(100%)	8(40%)	12(60%)
計	26(59%)	16(36%)	2(5%)	31(70%)	10(23%)	3(7%)	12(27%)	32(73%)	2(5%)	26(59%)	16(36%)	14(32%)	30(68%)	32(73%)	14(27%)

表3によると、宿泊するための建物については、全体からみると、新築、増・改築の割合が高かった。具体的に言えば、「宿泊客のために貸し別荘を新築する」が26箇所(59%)を占め、一番多く、その次に「自分の部屋か、以前の農業用の空き室を改良・改装する」が16箇所(36%)で、「自分の部屋をそのまま併用する」が僅か2箇所(5%)となっている。タイプ別からみると、農村農家楽では全ての接客室が(6箇所)新築され、名所型において新築されたものが16箇所(80%)となっている。それに対して、近郊農家楽では新築されたもの僅か4箇所(22%)であった。中心市街地から距離が遠くなると、新築と増・改築率が高くなる傾向が見られる。その理由は、農村・郊外では建設未利用地が多いことがあげられる。しかしながら、農家楽の改造に建設資金が必要なことから、名所周辺や農村地域において土地の売却が盛んになり、地域の景観を大幅に変えてきている。

トイレ、シャワー室の衛生設備は、全体からみると、「客用のため新設」が70%と最も多く、次いで「改良・改造」が23%であり、「家族用をそのまま使う」が7%であった。タイプ別からみると、農村・名所型の新築率の高いことに対して、近郊農家楽の共用率は相対的に高い。駐車場については、全体からみると、7割の農家楽には駐車場がなく、タイプ別みても同じ結果であった。「近くの空き地で止めてもいい」という意見が農家の経営者からよく聞かれた。

3.1.2 宿泊料金・従業員・サービスについて

1泊の出費(表3)によって調査した農家楽は三つのグループに分けられる。1泊には80元以上が36%(16箇所)を占め、50元から80元未満が59%(26箇所)であり、50元未満の場所が5%(2箇所)となっている^{注14)}。タイプ別からみると、農村農家楽の宿泊料金が相対的に高いところが多く、80元以上の場所が約7割となっている。その理由は、宿泊室は新築別荘であり、地域には他の宿泊施設が少ないことがあげられる。50元から80元未満のグループについては、料金が低い所は大体農家の自宅であり、一般的に室内にはベッドしがなく、他の整備も古い農家式であるが、昔の農家の雰囲気最も味わえるとも言われている。

この44箇所の農家楽全体からみると、専門的な従業員は約3割を占め、主に近郊型と農村型農家楽に集中している。名所型農家楽において専門的な従業員が居らず、その多くは経営者の家族、または地元の若者であり、殆ど一時雇用されている。

農家楽におけるサービスは、近年からも多様化になってきている。食事・レクリエーション以外には、以下のようなサービスが見られてきている。①周辺地域への交通案内・地図・アクセスの情報、②ファックス、コピー、カメラ・車のレンタル、③農産物の宅配便、バイク便、④会社向けの多用途会議室のレンタル、ネットサービス等。今回調査した農家楽は、近郊・農村のものにおいて全てこのようなサービスを提供し、名所農家楽では約6割が提供されている。

3.1.3 飲食及び農業体験の提供

食事の提供については、まず、「一泊二食提供する」が91%(40箇所)であり、「一泊朝食提供」が9%(4箇所)であった。また、「一泊朝食提供」としているところは名所農家楽に集中している。これは多くの名所農家楽への宿泊利用者は名所への見学が目的であり、宿泊はそのための足場としているからだと考えられる。全体からみると、欧米のような自炊式食事を提供したところはない。

農業体験の提供については、すべての農家楽は室内のレクリエー

ションを提供し、主にカラオケ、マージャンがあり、他の活動についての種類は①四季青果の収穫、②農産物の加工、③室外のレクリエーション、④自然散策・採集、⑤会社の会合・集会、⑥伝統文化の体験となっている。全体から見れば、中心市街地から距離が遠ければ遠いほど、農業に関連する体験活動が多くなっていく傾向がうかがえる。特に名所型の農家楽において、名所への観光も盛んに行われている。

3.2 宿泊利用者の意識調査について

図3 利用者の性別・年齢

図4 利用者の職業・収入

図5 利用者の居住地・交通手段・情報源

図6 利用者グループの性格

図7 利用者の来訪時間・利用回数・方式

図8 宿泊先選定に関する要因

3.2.1 宿泊利用者の属性

①利用者の性別・年齢

宿泊利用者は、男性 58%(168)、女性 42%(120)となっている。年齢別からみると、60 世代が 26%(74)と最も多く、40 世代と 20 世代いずれも 18%(52)を占め、30 世代が 16%(46)、50 世代が 13%(38)、70 世代が 9%(26)となっている。

②利用者の職業・収入

利用者の職業からみると、会社員 31%(90)、退職した方 28%(80)、自営業 19%(54)、臨時雇い 13%(38)、学生 7%(20)、その他 2%(6)となっている。社員がやや多い原因は、農家楽を会社の短期研修・会議の集合場として利用する傾向があるためである。

来訪者の収入については、55%(158)の来訪者が中収入者であり、39%(112)が低収入であったが、僅か 6%(18)が高収入者となっている。宿泊利用者は主に中低収入の人々であることが分かった。

③利用者の居住地・交通手段・情報入手源

75%(218)の利用者が株洲市市民で、17%(48)が省内の別の都市からきており、僅か 8%(22)が省外からきた。これらの現状は「農家楽観光において近くの来訪者を利用対象とすること」と一致している。

交通手段については、自動車の利用者が 75%(216)を占め、公共交通機関が 17%(48)、その他が 8%(24)となっている。「滞在している間に、自家用車を持つと便利」、「公共交通が極めて少ない」、「地域内部の移動は難しい」という意見がよく聞こえた。

宿泊先の情報入手源については、「友達、知人が紹介してくれた」70%(202)、「インターネットの掲示板からみた」20%(58)、「ガイドブックやパンフレットによる」10%(28)であった。宿泊に関する情報を主に口コミによって得られたとわかった。

④利用者グループの性格

全体からみると、同僚と一緒に利用する宿泊者が最も多い、48%を占め、次に友達と利用するのが 38%となり、家族と利用するのが 19%であった。家族より仕事仲間や友人と利用する特徴がうかがえる。

タイプ別からみると、自然の雰囲気が相対的に強い農村・名所型農家楽においては、家族での宿泊利用者が増え、同僚・友達とで利

用者が減る傾向がみられる。これはグループの性格によって利用者のニーズが変わるためだと考えられる。家族利用者はより自然・農業を味わうことを重視しているが、同僚・友達との利用者は相対的にレクリエーションに集中している。

⑤利用時間・頻度・方式

来訪時間については、週末 19%、ゴールデンウィーク前後 33%、夏休み 13%、建国記念日の休み 28%、旧暦元旦の休み 7%となっている。長い休暇に宿泊来訪者が多い傾向がみられる。

業務関係での宿泊を除き、宿泊を伴う農家楽利用について、1 年間あたり平均 2.6 回で、1 回あたりの平均 1.7 泊となり、旅行回数の多い来訪者の方が 1 回あたりの宿泊数も多い傾向がうかがえる。

3.2.2 宿泊利用者の意識調査

①宿泊先の選定について

宿泊先を選定する際に、利用者は農家楽のどのような面について期待しているのかを調査した。まず、農家楽の定義によって宿泊先の要素を「観光」、「建物・設備」、「ホスピタリティ」、「アクティビティ」に分類し、そして、来訪者を「20～39 歳まで」、「40～59 歳まで」、「60 歳以上」にグループ化した。また、分類した要素に対して来訪者の評価を重視程度によって、「全然期待していない」を「-2 点」とし、「期待してない」を「-1 点」とし、「どっちでもない」を「0 点」とし、「やや期待している」を「+1 点」とし、「大変期待している」を「+2 点」とし、年齢グループの人数によって農家楽宿泊先への期待を数値化した。

図 8 で示した通り、来訪者が以上 4 つの要素への期待はいずれも 0.8 以上の期待度を示している。全体からみると、最も高いのは「観光」の 1.18 であり、これは農家楽の宿泊先に対する利用者の全体イメージとしては、豊かな自然や美しい景色等がみられることであるため、当然の結果だと思われる。次に「アクティビティ」に対する期待度がやや高く、1.07 であった。年齢別からみると、年齢が増えるほど、「観光」への期待が高まり、「建物・設備」に対する重視程度が低くなる特徴がうかがえる。また、「60 歳以上」のグループにとって、「ホスピタリティ」に対する重視程度も相対的に高い特徴がみられ、これは高齢者自身の特徴に対応しているものだと考えられる。

図 9 タイプ別みた宿泊機能に対する評価

図 10 年齢別からみた宿泊機能に対する評価

1	位置の環境立地
2	自然的な環境立地
3	社会的な環境立地
4	交通の環境立地
5	宿泊建物の外観
6	宿泊室の内装
7	食堂・レストラン
8	トイレ・シャワー室
9	冷暖房
10	寝具
11	従業員の気配り
12	経営者との交流
13	地域人々との交流
14	プライバシーの保護
15	サービス
16	農産物収穫体験
17	食品加工
18	農作業体験
19	室外レクリエーション
20	室内レクリエーション
21	グラフィック体験
22	観光地巡り
23	散歩・ハイキング
24	部屋にのんびりする

②宿泊機能に対する評価

ここでは利用者による宿泊機能についての評価をみる。宿泊機能への評価に関与する要因は、農家楽の立地環境特徴や、「建物・設備」、「ホスピタリティ」性、「アクティビティ」等は重要な項目だと考えられる。この調査では、まず、立地特徴を「位置的な環境」、「自然的な環境」、「社会的な環境」、「交通的な環境」に分け、「建物・設備」、「ホスピタリティ」、「アクティビティ」についても細かく分類した^{注15)}。そして、宿泊客が分類した要素に対する評価を「大変満足」から「大変不満」までに対応して得点「+2」から「-2」まで1点の間隔尺度とし、宿泊者回答数によって平均値が得られた。

年齢別にみた来訪者評価の結果については(図10)、40～59歳の回答者の評価は全回答者の結果と近い傾向がみられる。立地特徴に対して、60歳以上の利用者は農家楽の「位置の環境立地」(0.90)と「交通の環境立地」(0.84)に対する評価が低かった。また、「従業員の気配り」、「経営者との交流」、「地域人々との交流」、「サービス」、「アクティビティ」の多くの項目に対し、20～39歳の若い利用者の低い評価に対して、60歳以上の方からの評価が高いことがみられた。これらのことは、利用者の年齢階層によって宿泊機能に関わる項目に対する重視レベルが変わることを示している。

立地特徴については(図9)、近郊型農家楽の「交通的な環境」(1.25)と、農村・名所型農家楽の「自然的環境」(1.21、1.50)に対する評価が高かった。内部の「建物・設備」、「ホスピタリティ」、「アクティビティ」については、近郊型農家楽の「客室内装」(1.19)、「食堂・レストラン」(1.19)、「寝具」(1.49)等に対する評価は相対的に高く、農村農家楽において「アクティビティ」の多くの項目に対する評価が高かった。名所型農家楽において、建築の外観(1.28)、プライバシーの保護(1.2)、室外レクリエーション(1.27)、観光地巡り(1.29)等への評価は高かったが、食堂・レストラン(0.72)、経営者との交流(0.66)、地域の人々との交流(0.71)への満足度が著しく低かった。これらのことから、農家楽立地特徴や内部条件によって利用者の評価も、問題点も異なり、宿泊機能を向上するためには、農家楽のタイプ別に対応することが必要だと考えられる。

③利便施設に対する評価と理由

ここでは利便施設の充実を中心とする宿泊機能の評価を見る。宿泊に関わっている利便施設は、主に公共公益施設、食料品販売施設、日用品販売施設、医療・福祉施設、文化・教育施設、汚水・ゴミ処理施設があげられる。このような項目に対して利用者の意見を求め、得点は宿泊機能に関する評価と同じような方法で算出した。

全体からみると(図11)、「医療・福祉施設」(0.52)、「文化・教育施設」(0.52)、「汚水・ゴミ処理施設」(0.50)に関する得点が相対的に低かった。これらは農家楽の経営において利用者の直接のニーズに着目し、宿泊機能を支える基盤についてはそれほど重視していないことを示している。タイプ別にみると、近郊農家楽の「公共公益施設」(1.42)、「食品販売施設」(1.20)、「日用品施設」(1.16)についての得点が高かったが、都市からの距離が増えると、多くの項目への評価が低くなっている。最も低いのは名所農家楽の「医療・福祉施設」に対する評価であり、僅か0.32である。主な不満の理由は図12に示している。特に「営業時間が短い」、「数が少ない」、「住む場所から遠い」があげられた。日常的によく利用する施設については、立地・サービスの便利さや、値段の安さと共に求められていることが推測さ

れる。以上のことから、宿泊機能に関する要因として、利便施設も利用者の評価として重要であることが示された。

図11 利便施設に対する評価

図12 利便施設に対する不満の理由

図13 利用者の利用志向

図14 利用したくない理由と要望

図15 利用者の要望

④宿泊への利用志向・要望

来訪者の利用意向については(図 13)、全体からみると、「行程・時間の余裕によって泊ってみたい」という回答が約半分を占める。利用したくない理由をみると(図 14)、「宿泊先の個性がなく、建物からアクティビティまで全て似ている」、「観光できる場所が少ない」、「農村の特徴が失われつつある」、「衛生・盗難・消防等への心配がある」等となっている。これらの問題は、農村にある農業・自然資源等の活用が低迷していることと、基本的なインフラ施設が遅れていることから生じていると思われる。タイプ別からみると、名所型農家楽の「利用したい」の回答比率が最も高く、56%を占めており、これは名所農家楽が自然の豊かさと建築外観の良さを持つ、観光地巡りができることと関わっているためと考えられる。一方、「利用したくない」回答率の高い近郊農家楽については、農家の雰囲気弱い、観光資源の不足、農業に関連するアクティビティも少ないことが主な原因であると推測される。ここでは宿泊利用者の要望についても尋ねた(図 15)。「周辺の散歩・ハイキングできる場所」、「気軽に観光ができる場所」、「農産物収穫体験教室」、「農産物加工教室」、「クラブ体験教室」、「地区人々との交流できる場所」等を望む割合が相対的に高い。設備の改善と施設の充実を進めつつも、農村にある自然・農業の魅力を維持・活用することがより強く望まれていると言える。

⑤宿泊に関する自由意見

表 4 自由意見の分類

番号	項 目	数	割合
1	農家楽の内部環境(駐車場、集会室、緑、建物外観等)	47	22%
2	宿泊先の立地(農家楽への交通・公共施設等)	36	17%
3	宿泊建物・客室の内部条件(間取り、設備、騒音問題等)	32	15%
4	全体の満足に関する意見	28	13%
5	管理、運営	24	11%
6	宿泊するための出費	23	11%
7	その他	21	10%
合計		211	100%

表 5 利用者の自由意見

項目	具体的意見
立地	①農家楽に関する情報が取得しにくく、改善してほしい。②農村への道には交通標識が少ないため、たずねにくい。③農村への道が狭く、舗装は悪い。
要望	①市内の路線バスを農家楽に延ばしてほしい。②道等を整備してほしい。
全体的に	①自然の雰囲気を感じられるが、文化的に不毛の地となった感じをする。②飲食・レクリエーションセンターの感じが強い。③「俗世界から離れられる」という感じはまったくしない。④自然への配慮が足りなく、農業資源の利用程度が低い。
建築	①全体からみると、マッチ箱のような新築ものが多すぎ、もっと考えた設計が望ましい。②古い農家の部屋と新築された建物が近すぎる所にあるため、強烈な対比によって変な感じが出る。③少数民族風の建物は目立つような存在と感じている。④建物の表面に殆ど白いタイルが張られ、みにくい。⑤規制が不足ため、広大な農村地域に新築されたものが点々となっている。農村全体景観が変わってしまった。
客室	①エアコン等の電気製品いずれも備えて、農家の雰囲気が感じにくい。②ベッドや布団等はカビのにおいがするため、衛生の状態について心配する。③トイレの衛生状況良くない。シャワー室も使いにくい。④部屋の管理が混乱し、盗難・消防の問題について心配する。⑤蚊・虫・ネズミが多い。⑥道から近いため、騒音・排気ガスの問題がひどい。⑦まったく知らない人と一緒に住むことに心配する。
集会室	①用途が単一であり、会議以外の目的で殆ど使えない、②必要な設備が少ない。③室内の音響効果が悪く、部屋の防音効果も良くない。④インターネットが使えない。④子供の教育、利用者と地区人々との交流等の目的にも使えるように改造してほしい。
駐車場	①数が少ない。②夜間の照明・安全対策が悪い。③狭い所でのユーターンもできない。④利用者ための駐車場がほしい。
緑	①草が繁茂しすぎて行きたい場所へ行けない。②飾るため植えられた植物の種類は単一である。③樹木が多いこと魅せられて滞在するのに、建設によって伐採されてしまったケースが多い。④緑の中にはゴミだらけである。⑤遊び場としてのスペースが少ない。
料金	①宿泊を支えるための出費は思ったより高すぎる。②一部の別荘の料金が安い。
体験	①他の場との活動が類似しているため、新鮮感がない。②地域の人々との交流のチャンスがとれない。③子供を教育するための体験活動が少ない。④農業に関連する活動が少ない。
要望	①自炊があってほしい。②農村にある自然・古い農家建物等を残してほしい。③地元の文化・歴史を活用することが望ましい。④旧家の立派な大黒柱や梁を含めて伝統的な農家建築を残してほしい。

表 4 は、来訪者の中の 72 人から得られた 211 件の自由意見であり、ように、まず、これらの意見を「立地」と「内部環境」に二つのグループに分けられている。分かりやすくするため、表 5 に示すように分類し、また、「内部環境」については、「建物・設備」、「ホスピタリティ」、「アクティビティ」の方面からそれぞれの問題をまとめている。

宿泊先の立地と言えば、「情報源が足りないこと」と、「行く道には標識が不足や、道の幅が狭く、路面条件が良くないこと」等を問題としてあげられる。特に立地に関して利用者が「路線バスで行けたら良い」との要望があった。この点については、農家楽への交通機関を設ければ、利用者がさらに増えると考えられる。「内部環境」に関する意見から見ると、宿泊先の全体に対して、利用者から「文化的な不毛の地と感じられ」、「飲食・レクリエーションセンターとなっている」、「自然への配慮がたりなく、農業資源の利用程度が低い」等の意見が得られた。詳しい項目に関する意見は、主に駐車場、集会室、緑、利便施設に集中している。「専用の駐車場の数が足りない一方で、照明・安全対策が悪い」、「集会室には必要なものがなく、用途が単一で、他の用途も実現できればいい」、「植物が繁茂しているため、行きたいところに行けない」、「飾るため植えられた植物が少ない」、「建設によって大きな木を伐採してしまう」となっている。

その他には、建物外観の設計、接客室の整備、体験できる活動の欠如、騒音・照明等の意見が得られた。特に、「マッチのような建物が多すぎ」、「新築されたものと元の建物との調和感がとれていない」、「少数民族風のもが目立つような存在と感じている」等の意見が得られた。これらは、農家楽の開発における全体規制の不足によって生じ問題だと考えられる。利用要望としては、「自炊があってほしい」、「伝統的な古い農家建物が残されて欲しい」等の意見があった。

4. まとめ

(1) ①農家楽の宿泊機能は、利用者が短期滞在できる一方で、農村観光・農業体験を通して地元の人々との交流といった活動を付加する宿泊形態にあり、家族による観光や会社の研修・集会等の多岐に渉る利用ニーズに対応している。②株洲市の場合には、農家楽の宿泊機能は 2003 年から大きく発展し、接客設備や施設が急速に改善されてきている。しかしながら、近郊・農村農家楽においては、施設を建設するための資金・土地を必要とすることから、農業との両立が困難となっている。名所農家楽においては、名所地を特別な資源として利用できるため、宿泊機能が大幅に発展し、ホテルのような建物・設備を持つようになった。

(2) 宿泊利用者は、近くの地域から、自家用車を利用する会社員や、退職した人々を中心とした中低収入者が多いのが特徴である。グループの性格からみると、近郊・農村農家楽への利用者は職場の同僚・友人での利用する割合が高いが、名所農家楽への利用者は家族での利用する割合が高い。長い休暇に宿泊利用する傾向がある。

(3) ①農家楽の宿泊機能の魅力は、全体的に「観光」と「アクティビティ」の二項目があげられる。年齢別からみると、若者は「建物・設備」に魅力を感じているが、高齢者にとって「ホスピタリティ」性を魅力に感じている。②宿泊機能に対する評価については、近郊農家楽の「交通的な環境」と、「設備・施設」における多くの項目への評価と、農村・名所農家楽の「自然的な環境」、農業体験・室外活動等に

対する評価が高いが、近郊農家楽の農業体験活動に関わる項目への評価は低い。これらの結果は、農家楽の立地特徴を活用したことによるものであり、当然な結果だと考えられる。③年齢階層からみると、利用者は農家楽の「ホスピタリティ」性、「アクティビティ」の多くの項目に対する評価が著しく異なる。高齢者は農業体験や交流活動に対する評価は高いが、若者の評価が低い。利用者の年齢階層の特徴に応じてサービスを提供することが求められると考えられる。

(4) ①宿泊機能を支える便利施設についての評価は、都市部から遠くなると評価が低下する傾向が見られる。その理由としては、施設の立地の不便さや、サービス質の低下、料金の高いことがあげられる。特に名所農家楽においては、医療・福祉施設、文化・教育施設の増加が求められていると考えられる。②利用志向からみると、利用者の半分以上を超えて、続けて利用したい農家楽は名所型のみとなっている。利用したくない理由は、宿泊先の特徴がなく、観光できる場所が少なく、出費が高い等となり、また、衛生・盗難・消防への不安もある。これらの問題は、宿泊先にある自然・農業資源の活用が十分にできないことと、宿泊機能を支える交通手段や便利施設のインフラ施設が遅れていることから生じると考えられる。

(5) 宿泊機能を向上するために、利用者の要望と意見に速やかに対応し、農家楽の内部環境や便利施設を整備し、地元にある自然資源の魅力を活かしながら、専門的な人材を充実させることが必要だと考えられる。可能な限りに宿泊先の周辺には自然との親しむ空間をつくり、近郊農家楽では農業体験活動を増やし、近郊・名所農家楽では交流活動を促進することによって利用者がさらに増加すると考えられる。これからの農家楽事業においては、顕在化されていない農村にある文化・歴史・農業価値を見つけ出すことも必要であり、また、各農家楽間の協力関係を構築し、それぞれの長所を活かして良好な機能を補完しあうことも重要であると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたって、株洲市観光局、株洲市商務局、株洲市地方税務局、株洲市天元区城市管理行政执法局の方々から、多くのご指導とご指導をいただき、ここに記して感謝致します。

注

- 注1) 新しい階段と言えば、王文亮が執筆した「中国観光業詳説」によると、①新たなインフラ整備を中心とすることから、現有インフラ施設を再利用・経済効果の向上を中心とすることへの転換、②観光資源の簡単開発・利用から、資源の再認識・総合利用への転換、③単一サービス経営から、本業を中心としての多角経営への転換、④従来の数量追及型の経営から、経済効果を重視する経営への転換、という四特徴があげられる。
- 注2) 2005年からの農家楽に関する研究の分類は、CNKIという学術論文検索システムで論文主題別によって検索結果であった。CNKI(China National Knowledge Infrastructure)のデータベースには中国大陸における発行された学術雑誌や新聞、学位論文、会議記録が収録されている。
- 注3) この89箇所の農家楽については、2007年8月から9月までの間に、日帰り利用者を含めて利用者の評価を把握するために調査した。今回の調査は、主に宿泊機能に関わる項目の利用実態を考察するため、宿泊できる場所と宿泊利用者に限定して実施した。
- 注4) 記号については、△、○、●はそれぞれ近郊型、農村型、名所型農家楽を表している。灰色の部分は株洲市の中心市街地であり、星印は地区政府の位置を表している。
- 注5) 宿泊利用者の意識調査は、株洲市天元区城市管理行政执法局の方々の協力を求め、2007年調査した89箇所の農家楽のうち、44箇所宿泊できる農家楽を選定し、調査表を農家楽の経営者に預け、定期的に回収・補充

して実施した。2008年8月15日から2009年7月15日かけて300グループから512枚調査表を回収した。本調査は、宿泊機能に関する来訪者の意識を解明することであるため、日帰り利用者は調査対象から除いた。

注6) 株洲市観光局が編集した「株洲市観光十年」による。図には農家旅館という言葉が記載されている。農家旅館は、明確的に定義されていないため、農家楽との区分は曖昧である。の二つのものに関する区別については、学者が「規模が比較的に大きく、客室等の設備が主に洋式であるものが農村旅館とされ、小規模で客室が伝統的な農家設備を備えるものが農家楽とされ、特に食事については、農家楽の場合には料理に用いる食材は農業・漁業・畜産経営等から直接に調達している場合が多いが、農村旅館では使う食材を購入するのが普通である」と指摘している。

- 注7) 名所型農家楽の平面図は一般的な2階の借り別荘であり、その中には経営者が住んでいる部分は入っていない。
- 注8) 漢族以外には、湖南省では土家族、苗族、瑶族、白族、回族、壮族等多くの少数民族がある。農村観光を契機に、少数民族部屋のスタイルや生活習慣、民間風俗、農業行事等を観光対象として省内に広がり、観光の人気ものとなっている。
- 注9) 参考文献2による。2000年前後農家楽宿泊機能を誘導するため、株洲では多くの農家楽においてホテルのようなサービス・施設を導入した。
- 注10) 株洲市観光局が編集した「株洲市観光十年」(内部資料)による。
- 注11) 分類基準は陳蕾らが執筆した「浅析農家乐的興亡和發展」(四川經濟管理學院學報, 2004. 3)による。農家楽の分類に関する基準が多くあり、例えば、農家楽の周辺環境特徴によって「水郷」、「花郷」、「竹郷」農家楽等に分け、地域の性格によって「近郊」、「農村」農家楽に分け、消費方式によって「一次性消費」と「即時消費」に分類し、農家楽の主題によって「現代農家型」、「田園風光型」、「民俗体験型」に分け、建築スタイルによって「古典園林式」、「現代園林式」、「歐米建築式」に分けている。だが、多くの農家楽における周辺環境や、建築スタイル等には顕著的に相違がないため、中心市街地から離れた距離と環境特徴により、近郊・農村・名所農家楽に分けられている。
- 注12) 参考文献2による。
- 注13) 表記については、洋は「様式」、新は「新築」、改は「改装・改造」、併は「併用」、◎は「専門的な従業員がいる」のを示している。タイプの近・農・名はそれぞれ「近郊」、「農村」、「名所」農家楽を指している。
- 注14) 2005年株洲市観光局が実施した観光調査によると、50元・80元は市民の「安い」、「普通」、「高い」と見分ける判断基準である。
- 注15) 農家楽の立地特徴は、都市から離れた距離によって異なるが、比較しやすくするため、文献によって農家楽の立地を「位置的」、「自然的」、「社会的」、「交通的」環境に分けている。宿泊するための内部環境には、「宿泊の場」、「飲食の場」、「社交的な場」、「観光・娯楽・レジャーの場」、「休息の場」、「ビジネス活動の場」等があるが、ここでは宿泊先を選択する理由に対応して考察するため、内部環境を「建物・設備」、「ホスピタリティ」性、「アクティビティ」に三グループ分類した。具体的に言えば、「建物・設備」には「建物の外観」、「客室の内装」、「食堂・レストラン」、「冷暖房」、「寝具」等を含め、「ホスピタリティ」には「経営者や従業員の気配り」、「経営者・従業員との交流」、「地域人々との交流」、「プライバシー保護」、「サービス」等を含め、「アクティビティ」には「農産物収穫体験」、「食品加工」、「農作業体験」、「アウトドアのレクリエーション」、「室内レクリエーション」、「クラフト体験」、「観光地巡り」、「散策・ハイキング」、「何もしなくてのんびりする」等を含んでいる。

(2009年9月9日原稿受理、2010年2月26日採用決定)